

F2-60

神田川沿川の橋詰広場の空間特性と形成過程に関する研究

A Study on the Spatial Characteristics and Formation Process of Bridge Foot Plaza along the Kanda River

○斉藤萌¹, 阿部貴弘²*Moe Saito¹, Takahiro Abe²

Abstract: The bridge foot plaza was bustling in old days. Currently, there are various problems in the bridge foot plaza. This study aims to understand the spatial characterization of bridge foot plaza, and to analyze the background and the factor to such a spatial characterization.

1. はじめに

近年、2020（平成 32）年の東京オリンピックを念頭に、神田川をはじめとする都心部の河川において水辺再生の取り組みが進められている。ここでは水上タクシーやクルーズなど水面利用が進められているほか、これらの河川に架かる多様な橋梁も魅力となっている。一方、こうした橋梁に付属する橋詰広場は、必ずしも良好な状態とは言えないものが多い。かつては河川景観を楽しんだり、賑わいの場であったりした橋詰広場であるが、現在の神田川や日本橋川沿川の橋詰広場には、河川への眺望が遮られていたり、立ち入ることすら出来ない橋詰広場もある。

そこで、本研究では、水辺再生の取り組みに資する知見を得るため、現在の橋詰広場の空間特性を把握するとともに、そうした空間特性に至る背景、要因を把握・分析することを目的とする。

2. 研究対象

本研究では、神田川下流部のうち、日本橋川との分岐点から下流に架かる全 14 橋梁に付属する全 52 か所の橋詰広場（Figure 1）を対象とする。



Figure 1. Position of bridge in Kanda River

3. 研究方法

(1) 橋詰広場の変遷の把握

古地図や地誌等の文献調査に基づき橋詰広場の変遷を把握・整理する。

(2) 橋詰広場の空間特性の把握

現地調査に基づき、神田川の橋詰広場の現状の空間特性を把握する。その際、各橋詰広場の施設の種類や配置、植栽の配置、川に対して開けているか、広場に立ち入ることが可能か否か、さらに周辺の土地利用など、細かに記録をする。

(3) 空間特性の類型化

(2) の現地調査結果に基づき、空間特性を類型化する。

(4) 空間特性の形成過程・要因の考察・分析

以上の分析結果に基づき、現在の空間特性が形成された過程及び、要因について分析・考察する。

4. 調査結果

本稿では、最上流の小石川橋から最下流の柳橋まで、順に 1 番から 14 番の番号を振り、上流右岸を 1、上流左岸を 2、下流右岸を 3、下流左岸を 4 とした。なお、後楽園ブリッジは後楽橋に隣接しているため、一体として捉える。

(1) 周辺の土地利用

橋詰広場の周辺状況の利用方法について、商業、商業オフィス、住宅、商業と住宅の混在の 4 種類を中心に分類を行った。1 番から 4 番までは商業オフィスや学校が中心で、鉄道路線に隣接する橋詰広場もある。5 番から下流は商業が増え、商業と商業オフィスが中心となっている。10 番を境に、商住混在が増え始め、11 番と 14 番周辺には住居もあった。

(2) 類型化

全 52 か所の橋詰広場を河川眺望及び施設の集積状況の視点から X 型マトリックス図 (Figure 2) を用いて、以下の 5 つの空間特性に分類した。(Table 1)

①園地型

公園のように様々な施設が集積している。川側に施設が設置され、河川眺望が得られないところもある。

②開放型

施設の集積が見られず、かつ川側に施設が設置されていないことで比較的良好な河川眺望が得られる。

③占有型

トイレや交番など、施設がほぼ単独で占有している。川側に施設が設置されていることが原因で、河川眺望がない。橋詰広場であるはずの場所が、駅や店舗、駐車場、植栽で占有されている場合もこのタイプに含む。

④歩道型

橋詰広場が歩道の一部としての役割を果たしている。

⑤橋詰広場なし

橋の起・終点がすぐに街路であり、橋詰広場がない。

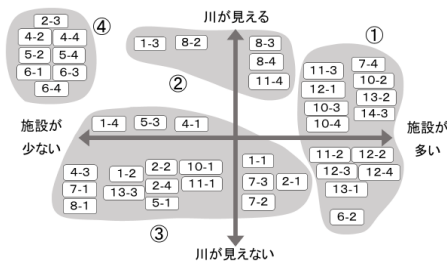
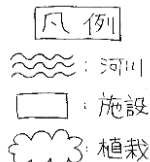


Figure 2. X type matrix diagram

Table 1. Model name and its schematic diagram

型名	模式図	対象の橋詰広場
①園地型		6-2, 7-4, 10-2, 10-3, 10-4, 11-2, 11-3, 12-1, 12-2, 12-3, 12-4, 13-1, 13-2, 14-3
②開放型		1-3, 8-2, 8-3, 8-4, 11-4
③占有型		1-1, 1-2, 1-4, 2-1, 2-2, 2-4, 4-1, 4-3, 5-1, 5-3, 7-1, 7-2, 7-3, 8-1, 10-1, 11-1, 13-3
④歩道型		2-3, 4-2, 4-4, 5-2, 5-4, 6-1, 6-3, 6-4
⑤橋詰広場なし		9-1, 9-2, 9-3, 9-4, 13-4, 14-1, 14-2, 14-4



(3) 各橋詰広場の変遷

古地図等から各橋詰広場の変遷を読み取った。橋の架け替えについての変遷を (Figure 3) にまとめた。●は現在と同じ位置に、○は同じ橋名の橋梁が現在とは違う位置に架けられたことを示している。

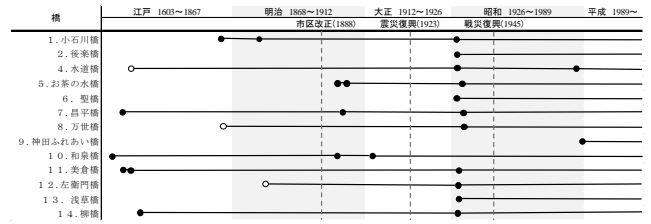


Figure 3. Age when the bridge was built

(4) 類型と変遷の関係

①園地型の橋詰広場の多くは、関東大震災の復興で架橋された復興橋梁に付属する橋詰広場である。震災復興計画では、橋詰広場が初めて制度化され、大きさや設置施設が定められた^[1]。施設に関しては、トイレ、交番、防災倉庫の3つ(3大施設)を置くことを基準としていたが、その後の利用として植栽や遊具等の施設を置いた結果、多くの施設が集積することになったと考える。

②開放型に属している橋詰がある1番, 8番, 11番の3橋は全て江戸時代に架けられていた。ただし, 8番は江戸時代にやや上流の筋違御門に架けられていた筋違橋の後継橋である。

③占有型はまず、鉄道高架下になっている橋詰広場が5か所あった。交番やトイレが占有している橋詰広場は、震災復興計画時に置かれた施設が占有していると考え。その他の植栽や駐車場が占有している橋詰広場の背景については、現段階では不明である。

④歩道型の橋詰広場は、橋詰広場から横断歩道が延びているため、歩行者の滞留空間として使われていると考える。

⑤橋詰広場なしに関して、13-4と14番は江戸時代から川側に街路が敷かれていたため、橋詰広場を設置することができなかったと推察する。

5. 今後の課題

今後の研究課題として、日本橋川を対象として同様の分析を行うとともに、変遷をさらに深く読み取り、整理し、類型化した特性との関連性を考察していく。考察する際には、周辺状況をふまえた分析とし、橋詰広場利用の質についても含めて分析を行う。

6. 参考文献

[1] 伊藤孝祐, 伊藤孝, 川西崇行: 「帝都復興事業により設置された橋詰広場の現状—東京を対象として—」, 土木史研究, 講演集, Vol.30, 2010 ほか
 [2] 地図出典: 国土地理院